

江戸時代 広島藩を支えた鉄の道 「芸北加計のたたら」
 「加計 隅屋鉄山絵巻」と加計・豊平町周辺の製鉄遺跡を訪ねて
 2005.6.20.



1. 広島の成り立ちに影響を与えた芸北のたたら
2. 家計町の町並み walk 街ぐるみ博物館
3. 「加計隅屋鉄山絵巻」に描かれた鉄の道と加計隅屋鉄山
4. 豊平町 中世の製鉄遺跡群を訪ねて
5. まとめ 芸北加計周辺の製鉄遺跡を訪ねて

広島湾に注ぐ太田川の上流五十キロ中国山地の中に「加計」という町がある。

広島より遡って来た太田川が狭い中国山地の山間を流れ、中国自動車道がその横を通り抜ける。

紅葉で有名な三段峡がある芸北の中心地である。

太田川に沿って加計を通して三段峡まで、可部線が通じていたが、今は廃止になっている。

江戸時代 繁栄を極めた芸北の「たたら製鉄の中心地」で、加計まで太田川の水運が開け、石見と芸州を結ぶ中継地として「鉄」を中心にその繁栄を支えたという。

そんな江戸時代の「加計のたたら」の様子を詳細に描いた絵巻が鉄山経営の中心であった加計町の加計家(隅屋鉄山)に残っている。江戸時代のたたら製鉄の工程や活動を生き生きと伝える貴重な資料である。

「たたら製鉄」について調べている中で、何度か断片的ではあるが、その絵巻の絵図に出会っている。

芸北は出雲・石見と並ぶ中国山地の大砂鉄地帯にあり、たたら製鉄の大生産地。古代のたたら製鉄との関係も調べてみたい。機会があれば一度は足を運びたい街のひとつが「加計」でした。

また、そんな中国山地のたたら製鉄について調べていて、広島の街が、この太田川を通じて、この「芸北のたたら」と密接に関係して出来上がった町であること知ってなおビックリでした。

6月20日 山口 美祢から神戸への帰り道 久しぶりに奥出雲 鉄のミュージアム 吉田村を訪ねるつもりで、中国道を走っていて、約1.5時間 吉和ICを過ぎて、「戸河内・加計IC」の標識を見て、切手にもなった「加計隅屋鉄山絵巻」を思い出して、そのままインターを出て加計の街へ行ってきました。



中国山地 加計・豊平町の位置



加計町の町並み(上)と街の中心にある江戸期鉄山経営の中心加計家(下)

思いつきで出かけてどうなるかと思いましたが、中国山地の山中深く 芸州と石見をつなぐ古い街道・海運の集散地 往時繁栄の面影を残す加形の街をゆっくり歩くと共に、加計や豊平町の役場・教育委員会・図書館などの人に色々世話になって、豊平町の「中世のたたら製鉄遺跡群」や「加計家 隅屋鉄山絵巻」の全体内容(模写パネル 加計町歴史民俗資料館で)を見ることが出来、素晴らしい一日でした。



豊平町 中世の製鉄遺跡群 坤東製鉄遺跡

1. 広島への成り立ちに影響を与えた芸北のたたら

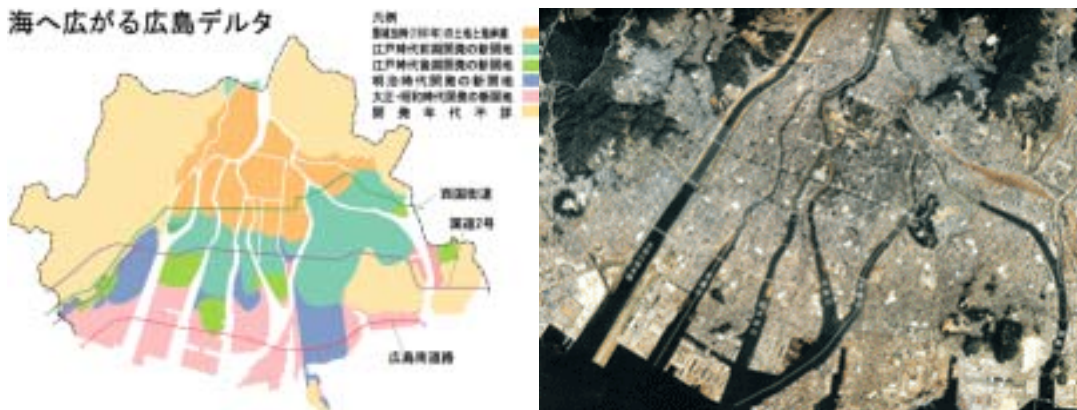


太田川の河口のデルタに発達した街 広島。

現在の広島の市街地のほとんどは江戸時代になって開拓された場所という。

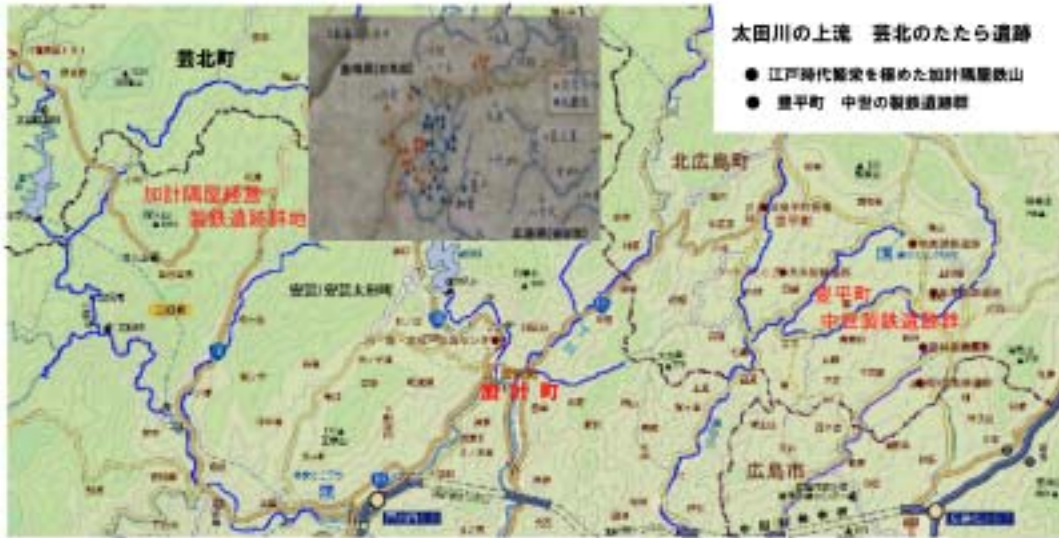
江戸期まで、広島の海岸線は現在の新幹線の広島駅と国道二号線の間あたりであつたという。

太田川の運ぶ大量の土砂と度重なる氾濫がどんどん海岸線を埋め立て今の市街地を形成していったという。



海に広がる太田川の河口 広島デルタ

その最大の原因は太田川の上流の中国山地にある大量の砂鉄を使った「たたら」製鉄だったという。
 江戸時代 この太田川上流の可部・加計などの芸北地方は日本でも有数のたたら製鉄による鉄の供給基地。
 太田川を使った海運の発達でこの鉄供給を独占した広島藩は潤ったという。
 ところが、たたら製鉄では材木の大量伐採による山の荒れに加えて、砂鉄採取のため、山の切り崩しと鉄穴流しによって、大量の土砂を川に流す。山砂に含まれる砂鉄の量は高々数パーセントであり、川に流される土砂も半端でなく、太田川の下流域の広島は度重なる太田川の氾濫に悩まされ続ける。
 広島藩は太田川流域の砂鉄採取・鉄穴流しを禁止する一方 太田川河口の治水・干拓開発に努め、現代の市街地が形成されていったという。



加計隔屋鉄山絵巻より 材木伐採



先大津阿川村砂鉄採取乃図より 鉄穴流し



山砂切り崩し



鉄穴流し

また、この鉄を独占した広島藩では、「縫い針」生産の地場産業が興り、現在もこの縫い針生産全国シェア100%という。

このようなたたら製鉄による山・川・河口域の大きな自然変化は

斐伊川流域の出雲平野の形成

兵庫県千種川河口赤穂の遠浅海岸の形成との製塩業発達など

が良く知られている。

市街地が狭く、山が迫っている広島町の形成と発展には江戸時代の太田川のもたらした大量の土砂流入との戦いと治水や鉄を中心とした海運の産物といえる。

広島市の市街地形成が江戸期芸北のたたら製鉄の繁栄と太田川の水運と切っても切れない関係があるなどはじめて知りました。

2. 加計町の町並み walk

なつかしさといやしの街 「街ぐるみ博物館 加計」



緑の山の中 戸河内・加計 IC を出て 加計の案内標識に従って西に向かう。すぐに太田川沿いに出て 10 分ほどで加計の街に出る。北から流れ込む滝山川の橋を渡ると加計の町並みに入る。川に沿って古い町並みが続いている。



滝山川が流れ込む 加計の町並みの入り口周辺 2005.6.20.

全く準備なしに加計にやってきたので、まず加計駅と役場を探して町のアウトラインとたたき遺跡の概要を教えてください。

駅前には加計の町並みの案内図があり、太田川の川沿いの街道筋に古い町並みが続いていることが判る。

加計は昨年秋周辺の町と合併して安芸太田町の一部。

街中の加計支所で滝山川沿いにある教育委員会に電話してもらおうと「たたら遺跡」「加計隅屋鉄山絵巻」のことなどこちらへ来たら教えてあげると。もう一度 街を車で通り抜けて、教育委員会へ。

まっすぐな街道筋の両側に立ち並ぶ古い町並みの街灯の柱に「鍛冶」や「太田川の魚や川舟」などのモニュメントがかけられている。教育委員会で教えてもらって、もう一度街に戻る事にする。



「街ぐるみ博物館」を称する古い町並み 加計

2005.6.20.

加計の街の入り口滝山川との合流点から少し登ったところに大きな建物「川・森・文化・交流センター」があり、ここに加計町歴史民俗資料館・教育委員会・図書館も入っていて、町の総合文化センターとなっている。そして、歴史民俗資料館の廊下の壁にはあの「加計隅屋鉄山絵巻」2巻合わせて15メートルに及ぶ絵図がパネルにして掲げられ、全容が見られ、また 資料館の中で「加計のたたら」のビデオが見られた。



川・森・文化・交流センター

教育委員会で、若い学芸員の人達が地図を広げ、あちこち電話をかけたたりして、加計町のたたら遺跡の状況を調べてくれ、加計町のたたら遺跡のリストをコピーしてもらった。

加計隅屋鉄山絵巻に描かれる鉄山は加計の街中に今もある「加計家」が江戸期に加計周辺の戸河内・豊平・芸北町などで経営したもの。そして、今も加計家で絵巻は所蔵されているという。



加計の街の中心にあるかつての鉄山跡 加計家

加計の町ははその加計家の本拠地で太田川の海運を使って必要な物資を諸国から集めるとともに製造された鉄を広島に送る集積地。

したがって、加計の街に鉄山師「隅屋」の屋敷があるものの街に隣接して「たたら遺跡」はない。

周辺北の芸北・東の豊平・西の戸河内に隅屋が経営した鉄山を含め、200以上のたたら遺跡がある。詳細は現地に行かないと判らないと地図を持ち出して 幾つかのポイントにチェックしてもらった。また、図書館では加計町史を見せていただき、加計周辺のたたら遺跡 加計隅屋鉄山絵巻と隅屋鉄山についての項をコピーさせてもらう。

「古代にもたたら製鉄が行われたと思われるが、この周辺では豊平町の中世たたら遺跡群が一番古い」とのアドバイスを受けて、もう一度 町に帰って 町並みとかつての鉄山師「隅屋」の「加計」さんの家を訪ねてから、豊平町の中世のたたら遺跡を訪ねることにする。

隅屋鉄山絵巻は加計町史で知った隅屋鉄山の概要とあわせて、次項でまとめた。

街に戻ると 町の入り口に近いところに「鍛冶屋館」と染め抜いた暖簾をかけた町屋 その隣に今も鉄を鍛えている現役の「鍛冶屋」が「トツテンカン」と槌の音を響かせている。



加計周辺で使われた鍛冶道具を展示している鍛冶屋館とその隣の鍛冶屋

製品のほとんどは石見神楽に使う道具類が中心という。

そういわれると石見神楽のポスターが街のあちこちに貼ってあり、ここは芸州広島と石見を結ぶ街道の結節点。石見神楽の道具類を今も街道筋にあたる加計で作っている。

かつては石見で作られた大量の原料砂鉄や小鉄が石見から運びこまれ、鉄素材が作られた。そして、この「鉄の道」が多くの物資を運び、人・文化の交流を担った。

この街でたたら製鉄が廃れた今も、その「鉄の道」が連綿とつながり、この加計と石見が結びついているのを知ってビックリです。

町並みのほぼ中心のところ街道に面して加計さんの大きな屋敷がありました。

かつてはこの「鉄山師 隅屋」の屋敷を中心にこの街道筋では往来する人でごった返したに違いない。

「隅屋鉄山絵巻」に描かれた街道筋の賑わいが目に浮かぶ。

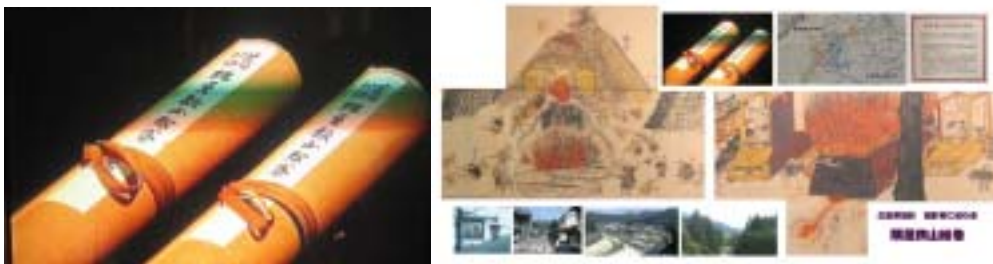


まっすぐな街道筋の両側に立ち並ぶ加計の古い家並み 右端 JR 可部線 「加計駅」

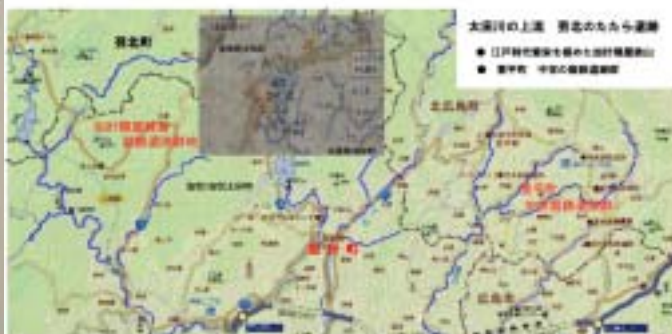


街中にあるかつて隅屋鉄山を経営した加計さんの屋敷周辺 2005.6.20.

3. 加計 隅屋鉄山と隅屋鉄山絵巻

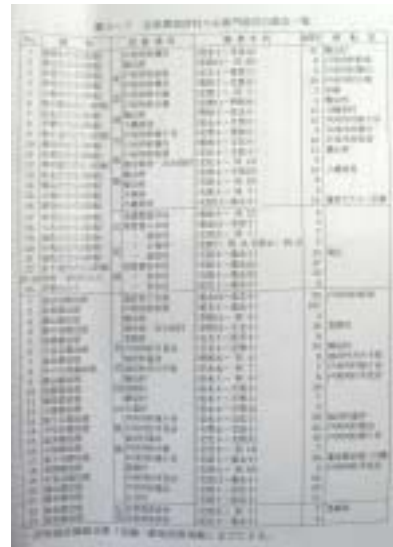


江戸時代 220 年にわたり芸北の中国山地加計で繁栄を極めた隅屋鉄山のたたら絵巻「隅屋鉄山絵巻」



芸北の中国山地 加計周辺では 南へ流れ下る大田川 北への江の川に大量の砂鉄があり、中世から近世初頭にかけて、たたら製鉄が盛んに行われ、江戸時代には西中国最大規模の製鉄場があった。

(但し、江戸時代には川が荒れるため、広島藩が大田川流域の砂鉄採取が禁じられたため、砂鉄は石見の国から運ばれた) 加計村の隅屋が営む鉄山が最大の規模。加計周辺で次々と鉄山を移動させながら 近世初期の寛永 19 年 (1642)から嘉永 6 年(1853)藩営に鉄山が移るまで約 220 年繁栄を極めた。

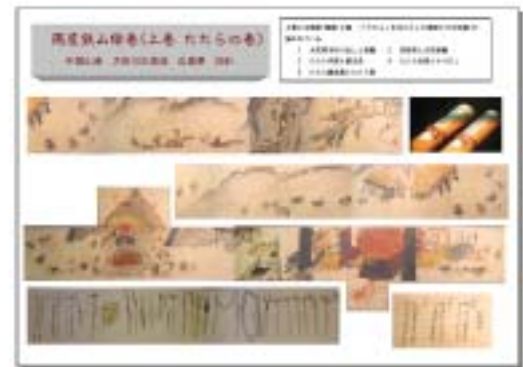


隅屋では 江戸時代を通じて二百年間 二十五カ所の「たたら」を経営
(加計町 町史 民俗編より)

そんな 隅屋経営鉄山の当時の製鉄作業工程や活動が上下 2 巻(上巻 たたらの巻 6.4 メートル 下巻 鍛冶・勘場の巻 8.5 メートル)に細かく描かれ、隅屋鉄山を営んだ加計家に伝わっている。原本を見ることはできなかったが、訪れた加計町 歴史民俗資料館の廊下の壁面を使って長さ 15 メートル全巻の絵図がパネル展示され、図書館所蔵の「加計町町史」にはこの絵図の詳細な解説が記述されていた。

上巻 たたらの巻には製鉄(精錬)工程である「たたら」を中心とした施設とその活動)が下記のような 5 つの連続絵図で描かれている

1. 大炭原木切り出しと運搬
2. 炭焼窯と大炭運搬
3. たたら内部と銑生産
4. たたら全景とケラだし
5. たたら諸道具とたたら歌



下巻 鍛冶・勘場の巻には鍛冶工程(大鍛冶)や勘場への原料搬入と鉄素材の搬出が描かれている

1. 山内勘場(元小屋)とその活動
(鉄山職人の飯料・鉄原料の搬入と鉄蔵への鉄の搬出)
2. 大鍛冶に用いる小炭の生産
(原木伐採・炭焼・俵積み・小炭小屋)
3. 大鍛冶場の鍛錬を中心とした活動
(大鍛冶場(中央が本場 左右が左下場))
4. 大鍛冶場 小炭焼の諸道具



江戸時代のたたら製鉄の各工程と職人たちの活動が生き生きと描かれており、加計周辺で営まれた鉄山の全貌が良く判る。この絵図で私が興味を持った場面は次のとおりである。

隅屋鉄山絵巻に見るたたら製鉄

a. たたら製鉄用の大炭窯と鍛冶用の小炭焼き

【 大 炭 窯 】



上巻部分 大炭窯

豊平町坤束製鉄遺跡に復元された大炭窯

上記絵図に描かれている二つの建物の右側がたたら製鉄に使われる「大炭」を焼く大炭窯。

大炭窯は幅約1丈奥行1.5丈程度で周囲を石垣で作り、祖目を少し掘り、笹を敷き、木材を並べその上に5.5尺ほどに切りそろえた大炭木を立てて並べて上に土を置いて天上を造り、4,5日焼く。

出来上がった大炭は半焼けの状態では形も不ぞろいになるが、たたら製鉄の炭としてはこれがかせない。

(加計町史 隅屋鉄山絵巻の記述より)

【 小 炭 焼 き 】



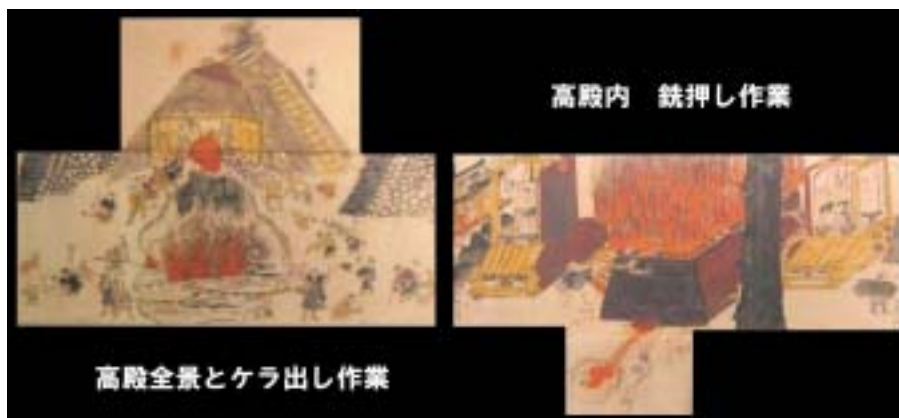
下巻部分 小炭焼き

鍛冶用に使う小炭焼きは窯を用いず、露天で雑木を積んで火をつける。全体に火が回ったところで濡れむしろで覆って焼成する。(加計町史 隅屋鉄山絵巻の記述より)

このように たたら製鉄に使う大炭は半生でたたら炉の中で長く形を保持し、かつ還元雰囲気形成を支援する。一方 鍛冶用の小炭は直ぐ火力が高まるように焼きしめられる。

たたら製鉄では炭が大事と言われてきましたが、その作業の様子が生き生き描かれています。

b. 高殿でのたたら製鉄作業



上巻部分 たたら製鉄の
主要な工程

鉄押し工程 (右)

ケラ出し工程 (左)

たたら製鉄の主要な工程 銑押し工程(右)とケラ出し工程(左)がダイナミックに描かれている。主工程である銑押しでは4昼夜連続の作業で炉の湯口から炭素含有量の高い銑鉄が流れ出て湯溜りにたまる。得られた銑鉄は大鍛冶の工程で脱炭・鍛錬され、鉄素材である左下鉄・包丁鉄に仕上げられる。この絵図左奥には金屋子神が祭られ 左右の天秤鞆には番子が乗って 休みなく風を送っている。また たたら炉の左前にいる村下が小金を炉に投入しているの見える。一代の銑押し作業が終わると炉を壊し、底に残ったケラ出しの作業が描かれている。(右)ケラ塊が引き出され、鉄池に投げ入れて急冷・分割が行われる。このケラ塊には炭素含有量の少ない鋼部分ケラが銑鉄とともにあり、細かく分割してケラを取り出し、鉄素材となる。また ケラ塊の周りには飛び散ったケラ片や銑鉄を拾い集める子供らが描かれている。

(加計町史 隅屋鉄山絵巻の記述より)

c. 勘場



下巻部分 鉄山の事務所 勘場

勘場は鉄山の事務所で中心的存在で その機能と活動が生き生きと描かれている。山内に入って来るたたら製鉄の原料 砂鉄・炭 生活物資 そして山内から出てゆく鉄素材の搬出の風景が描かれている。勘場の奥座敷に隅屋から派遣された手代が座り、駄賃などを計算している。またその右の内庭では米の計量や大鍛冶で作られた鉄素材の搬出の準備をしている。また 道を挟んで反対側では石見から運ばれてきた砂鉄・子鉄の収納 その前には搬出入の馬や人たちが数多く見られ、忙しい勘場の風景が描かれている。(加計町史 隅屋鉄山絵巻の記述より)

d. 大鍛冶



下巻 部分 細長い板葺小屋の大鍛冶工場

大鍛冶工場は4区に分かれ、中央の2区が本場 左右両端が左下場となっている。そのそれぞれに鞆を備え 小炭を焚いて鉄を熱する火窟がある。たたらから送られてきた銑鉄塊は左下場の火窟に入れられ、熔融脱炭され、左下鉄が作られる。それが本場に送られ、一割ほどのケラを加えて、火窟に入れ、熔融鍛錬のくりかえしによる精錬が行われ、卸し鉄・包丁鉄の鉄素材が作られる。左端の左下場では鞆を動かし、銑鉄塊を熔融脱炭。右端では出来た左下鉄を掻き出している。中央本場の左区画では卸し鉄を鍛錬していおり、右区画の手前では作業の終わった卸し鉄を整形している。

そのほか休憩中の人達やお茶を運ぶ女房たちなども描かれ、大鍛冶の実態が良くみてとれる。

(加計町史 隅屋鉄山絵巻の記述より)

断片しか知らなかった加計隅屋鉄山絵巻がこんなに詳細にしかもダイナミックに江戸時代の鉄山の様子が描かれている。

山口県の「白洲たたら」の様子を詳細を描いた「先大津阿川村砂鉄採取之図」にもビックリしましたが、多くのたたら製鉄に関わる職人が数多く、しかもダイナミックに作業している手元がえがかれているのにはビックリしました。

「たたら場での作業とその周辺 大炭と小炭の製造プロセスの実態 大鍛冶の具体的な連続プロセス 勘場の生き生きした様子など」断片的だった諸作業のアクションを具体的に眼にして、鉄山の様子が頭の中で連続的なつながりで頭に入りました。

この絵巻物そのものが「鉄の道」 ふっとそんな思いが頭をよぎっています。

4. 豊平町中世の製鉄遺跡群を訪ねて



加計の街を歩いた後 加計の教育委員会で教えてもらった豊平町の中世製鉄遺跡群を見に行く。

加計の町から北東の方向 太田川に流れ込む丁川を遡る。

豊平町にはこのあたりでは一番古い中世の製鉄遺跡群があるというが、詳細はわからないので、また 豊平町の教育委員会へ飛び込んで、教えてもらう予定。

加計の街を通り抜けると直ぐに太田川に流れ込む丁川。この丁川に沿って北へ谷筋を遡って行く。

この「丁川」の谷には加計周辺の川と同様 古代から多くの砂鉄を産したという。



加計から豊平への丁川沿いの道で 2005.6.20.

豊平町へは山越え道。20分ほどで山の南斜面高くまで段々状に広がる集落越えに差し掛かる。前をゆくダンプがジグザグ道を超えて行く。

ジグザクの段々道には石組みが生まれ、棚田が集落の間に広がっていた。



峠を越えて豊平町に入って

後で知ったのですが、この棚田の石組みはたたら製鉄の鉄山建築法の名残だといい、この加計周辺で数多くの鉄山が営まれたことをうかがい知れる。

ジグザクの道を登りきるとなだらかな高原が広がり、豊平町に入ってゆるやかな道を下ると豊平町役場のある戸谷の集落に入る。

(正式には合併で北広島町豊平支所)

町役場の人に電話をかけて貰って、たたら遺跡に詳しい教育委員の人のところで、豊平町のたたら遺跡について教えてもらう。

「行くのなら復元保存されている

坤束製鉄遺跡がいい」と遺跡の位置を教えてもらい、豊平の中世製鉄遺跡群をまとめたパンフ「豊平町中世製鉄遺跡 鉄のふるさと公園」をもらう。

ここにはたたら遺跡の出土品なども展示する民俗資料館があるのですが、残念ながら休館で入れず。また、加計でもそうでしたが、「たたら遺跡はゴロゴロあっちにもこっちにもあるのですが、行つても良く判らないでしょう。石ころが落ちているだけでさあ いけるかなあ・・・土地の人に聞いたら 行けんことないが・・・」

といわれたが、加計でも豊平でも本当に丁寧に色々教えてもらいました。



豊平町役場 現北広島町豊平支所

豊平町には古代から江戸時代にかけて200箇所を超える製鉄遺跡が確認されており、そのうち5つの遺跡が発掘調査がされ、12・13世紀中世の製鉄遺跡群として、そのいくつかが復元保存されているという。

鎌倉時代このあたりには多くの厳島神社の荘園が存在。この豊平町の西宗・中原あたりに当時三角野村と呼ばれた荘園があり、この三角野村は年貢として鉄を収めていた事が「厳島文書」に記されており、その収めていた鉄の量が多いことがわかっている。

このことから、中世の初めすでにこの豊平町周辺は中国地方有数のたたら製鉄の大生産地であった。

(資料「豊平町中世製鉄遺跡 鉄のふるさと公園」より)

下記に「加計町史」より、発掘調査された5つの中世製鉄遺跡群の概要を示す。

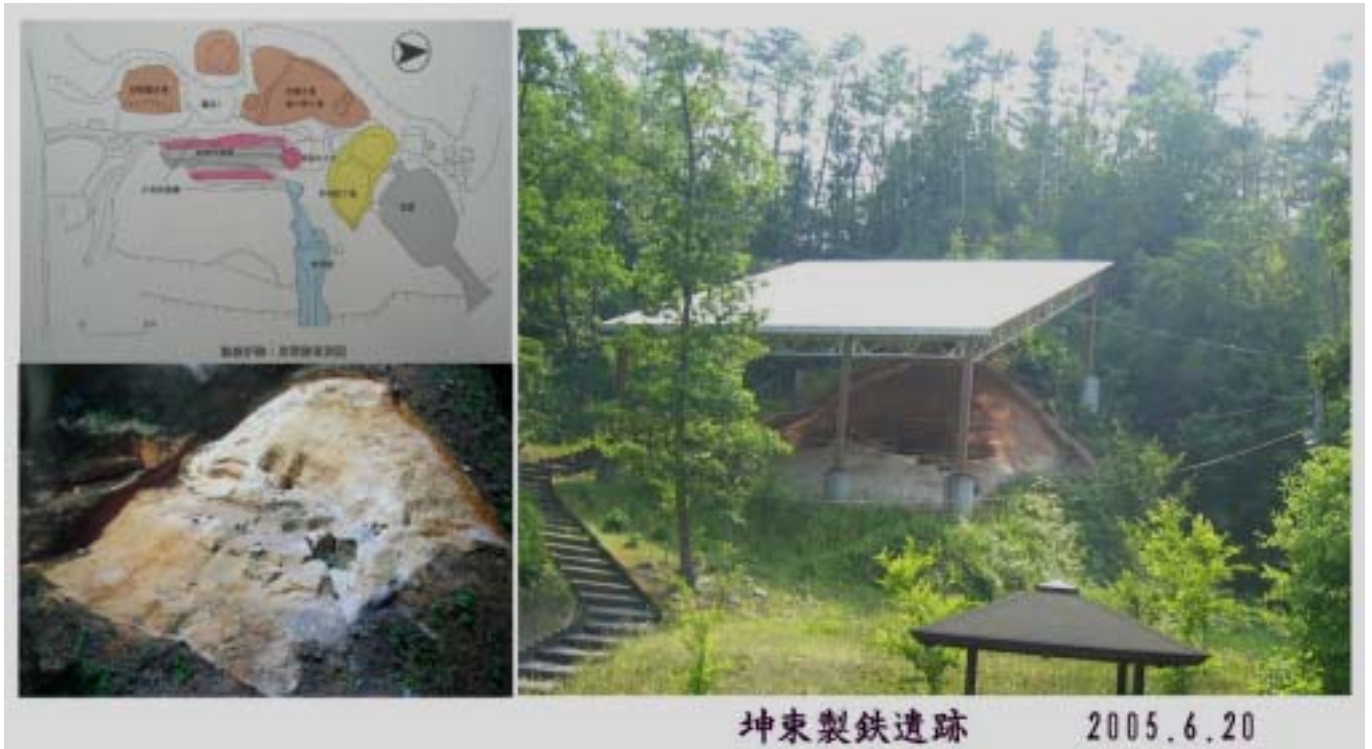
表3-5 豊平町域の製鉄遺跡(1997年まで発掘済)

遺 跡	遺跡名	時 代	製鉄炉型	炉の規模	地下構造	その他の遺跡・出土物
古 木	大久製鉄遺跡	12~13世紀	長方形箱型炉	長さ 幅 高さ 2m × 1m	長さ 幅 高さ 3.4m × 1.5m × 30cm	副土伊4基
今言田	岩林製鉄遺跡	13~14世紀	長方形箱型炉	2m × 1m × 1m	4.6m × 3m × 1m	副土炉・炭床・炉壁片・ 赤鉄・木炭・鉄屑・鉄滓 など
阿 坂	坤束製鉄遺跡	13~14世紀	長方形箱型炉	2m × 1m	4m × 40cm × 35cm	輪座・炭床・炉壁片・赤 鉄・木炭・赤土方部・刀 子炭・鉄木炭・相模鉄
今言田	壺ノ原製鉄遺跡	13~14世紀	長方形箱型炉	2.6m × 1.1m × 85cm	4.6m × 1.1m × 45cm	輪座・副土炉・炭床・赤 鉄遺跡・炉壁片・鉄滓・ 砂鉄・木炭など
阿 坂	大東製鉄遺跡	14~15世紀	長方形箱型炉	2m × 1m	4.6m × 85cm × 74cm	

出典：「今言田若林遺跡発掘調査報告書」(1995年豊平町教育委員会発行)、「坤束製鉄遺跡」(1997年豊平町教育委員会発行)、「壺ノ原製鉄遺跡発掘調査報告書」(1997年(株)広島県歴史文化財調査センター発行)。

教えてもらった中世の製鉄遺跡群の中から、坤束製鉄遺跡・矢栗製鉄遺跡の2つを見学できました。

坤束製鉄遺跡



役場から15分ほどで、教えてもらった「道の駅 どんぐり村」。

町の中央に聳えるシンボル龍頭山が北正面に見える丘陵地で、丘の上に道の駅 民俗資料館 体育館・運動場・コートなど 豊平町の総合公園になっていて、たたら遺跡の出土品なども展示する民俗資料館があるのですが、残念ながら休館で入れず。

この丘上の公園を抜けて南に下ったひっそりとした谷筋の山肌に坤束製鉄遺跡が復元され「鉄のふるさと公園」として整備されていました。

この坤束製鉄遺跡では 山肌の平坦部に13~14世紀の製鉄炉・鞴・炭窯・炉壁捨て場 排滓場などの一連の製鉄場全体が出土し、発掘調査後 全体に屋根がかけられ、炉や鞴・炭窯を復元展示し、たたら場でたたら場の構造・使われた原料など一連の作業が理解できるように展示されている。

こんなたたら遺跡の展示法があるのだとうれしくなる。



坤束製鉄遺跡 全景

2005.6.20.

たたら遺跡の展示というと

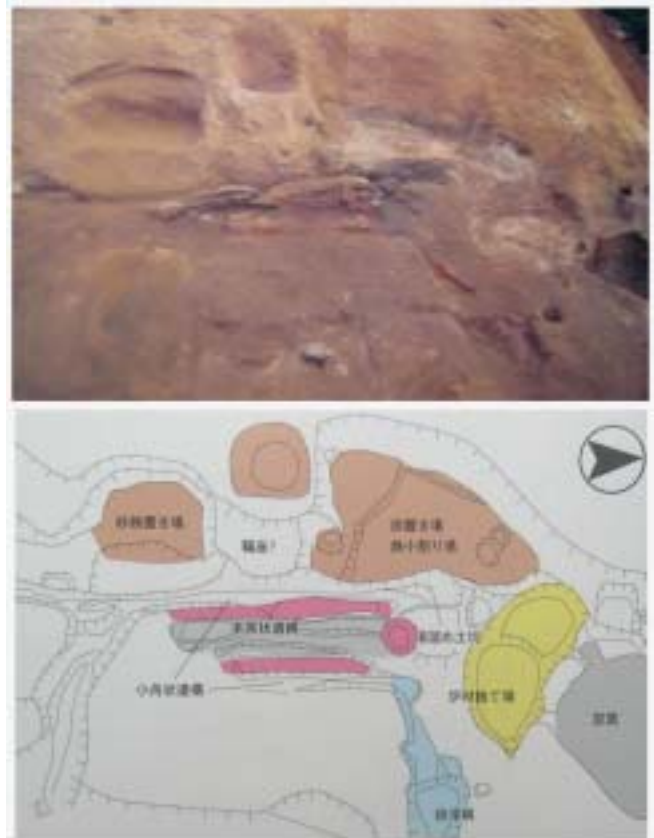
発掘調査後 簡単な資料つくって、遺跡は完全に破壊され、たたら遺跡の痕跡も残っていないか、たたら遺跡を埋め戻して簡単なごく一部だけ模型的に復元するか、

現地に立派なたたら館を建て、遺跡そのものは草ぼうぼう 古い説明板が立っているのみ
こんな図式が多いのですが この坤束製鉄遺跡では、説明案内を最小限傍らの案内板にとどめ、そこにあつた現物と作その構造・作業が自分で膨らませるように遺跡が復元展示されている。
詳しい説明はパンフレットに収められている。 こんなたたら遺跡の展示があつたと・・・・・・・・・・
本当にさりげない何の変哲もない展示なのですが、自分の興味に合わせ、状況がずっと頭にはいる。

右端の階段を上ってゆくと たたら炉下の傾斜地が排滓場で鉄滓があたり一面に散らばっている。その上の傾斜部を掘り込んで たたら炉と炭窯が建設されている。



排滓捨て場



発掘調査時の状況

製鉄炉は 2mX1m の箱型炉で 2本の土堤で作られた本床状遺構とその両側に溝(小舟状遺構)の地下構造遺構がそっくり出土。その両側に鞆座。

このたたら炉の直ぐ上 鞆座の左右に砂鉄置き場と炭置き場。立派な高殿が建設される前の時代 山肌の斜面部にこんな配置でたたら場が納まっていたのか 簡単な屋根がかけられていただろう。



復元されたたたら炉



復元された炭窯

それら遺構の半分を残して断面が判るようにたたら炉が復元展示されたたら炉の下部の構造までよく判る。また この製鉄炉に隣接して出土した炭窯も復元展示されている。 断面を切り取って 構造も復元されているので、たたら炉 炭窯の構造が本当によく判る。

また、「狭い山の斜面でどんな配置でたたら場があつたのか 」 これに答えてくれる遺跡はすくない。山の斜面や 発掘後の一部の炉跡のみを見ても中々イメージわかず、断片的な発掘時の写真や図面はよく見かけるのですが、遺跡の現地で全体がはつきりイメージできるのがうれしい。

草ぼうぼうのたたら遺跡やたたら遺跡そっちのけの立派なたたら館を見る機会が多い中 こんな保存展示もあるとうれしくなりました。

矢栗製鉄遺跡



坤束製鉄遺跡から道なりに少し南に行くと道の左手に矢栗製鉄遺跡の標識が見え、ひとけのない左の緑の丘陵地の谷間に小道が続いている。約500mほど小道を進むと熊笹などブッシュで覆われた右手の丘陵の斜面に隣接して小さな池があり、その向こうに矢栗製鉄遺跡の案内板。



矢栗製鉄遺跡へりの入り口

案内板のところから、ブッシュに覆われて細い道が残っているが、全く地面は見え、丘陵地の斜面の下の平坦地の地形とその下の池の小川が製鉄遺跡の痕跡を残しているのみである。

ここからは14~15世紀頃の箱型炉が出土したというが、土器が出なかったので年代の詳細はわからない。

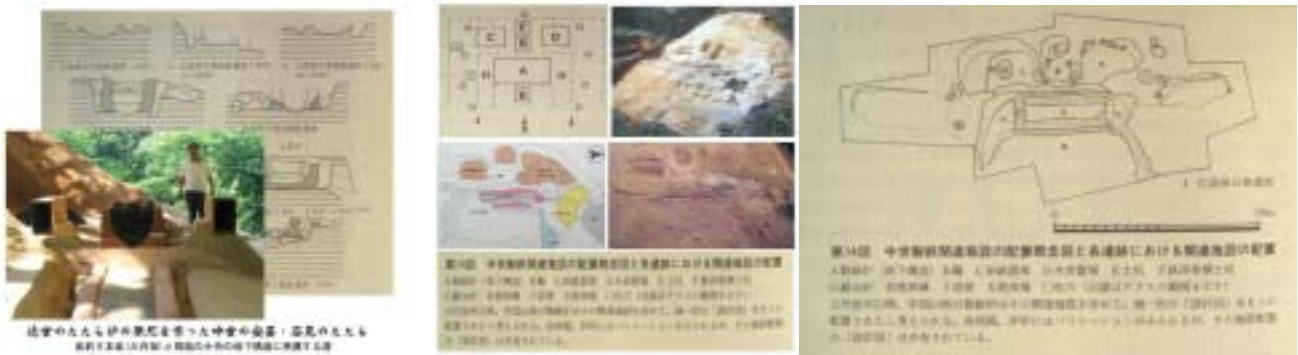


クマザザで覆われた矢栗製鉄遺跡 2005.6.20.

中世の安芸・石見のたたら製鉄が近世の永代たたら原形をつくった

村上恭道氏「倭人と鉄の考古学」によると 産鉄国として古代には登場しなかった安芸・石見のたたらが中世になると一躍脚光を浴びる。

この豊平町のたたら製鉄をはじめ、安芸・石見のたたらが生産性のよい永代たたらの原型となったという。



中世の安芸・石見のたたら製鉄が近世の永代たたら原形をつくった

中世のこの地域のたたら炉には近世永代たたら炉の原形といわれる防湿施設である地下構造として、製鉄炉直下の舟形の土擴の両脇にも一条の溝を有し、防湿性を高めている。この構造が近世たたらの地下構造「床釣り」の本床(大舟)と小舟に発展したと見られている。

また、このたたら炉ばかりでなく、この地域のたたら場には共通の現象がある。

たたら炉および砂鉄置き場 木炭置き場 鞆座 木炭窯 土土擴など製鉄諸関連施設の配置にほぼ同じ規則性があり、たたら場に設計図があったとみられている。

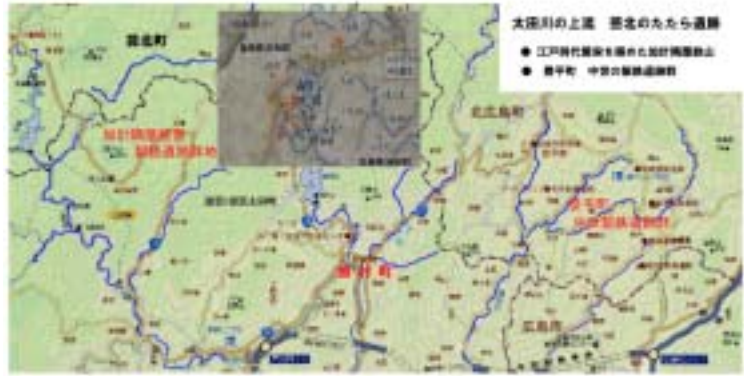
これらたたら炉・たたら場の原形がその後近世の効率のよい永代たたらを生み、大量生産の原形を作っていったと考えられる。

古代の庸調鉄・官営でなかつたこの地域の鉄が、需要の拡大と共にその生産性を高め、たたら炉・たたら場を統一改良して、均質・低コストの生産を可能として、商品価値を高め、益々商用鉄として畿内へ流れていったと考えられている。

そして、近世には この安芸・石見のたたらがモデルとなって、全国に広がって行くと共に この地がたたら的一大生産地になつていった。

この豊平町の中世の製鉄遺跡群はそんな古代と近世のたたらをつなぐ重要な製鉄遺跡である。

5. まとめ 芸北加計周辺の製鉄遺跡を訪ねて



広島市から太田川を遡った中国山地の谷あいの街「加計」

江戸時代 中国山地有数の繁栄をした「たたら製鉄」の大生産地帯で、その中心であった「加計 隅屋鉄山」思いがけず中国道を走っていて見かけた「加計 IC」の標識に、断片しか知らなかった「加計隅屋鉄山絵巻」が頭をよぎり、加計 IC で出て 加計を中心とした芸北のたたら遺跡を訪ねました。

太田川の名は知っていましたが、中国山脈の奥深くから流れ下る大河であることや中国山地の奥深くまで海運が開け、その中心に「芸北のたたら鉄」があったなどほんとうにビックリです。

「古代にまで遡れるたたら遺跡の情報があれば」と思いましたが、よく判りませんでした。

でも この地では鎌倉時代の初め、年貢として「鉄」を荘園主である厳島神社に納めていたことが判り、また、石見との交流など古代にも遡れる興味をもちました。

江戸時代のたたら製鉄の様子を描いた「加計隅屋鉄山絵巻」先に見た「先大津阿川村砂鉄採取之図」に勝るとも劣らぬ「鉄の道」の描写。上下巻あわせて2巻の絵図がパネルに写されて、加計の民俗資料館の壁に連続して掲げられている。それを見る目はもう たたらの工程を映画で見ているよう。

勘場・たたら場の作業の様子 原料・鉄の搬入・搬出・運搬の街道筋 が本当に表情が見えるがごとく生き生き書かれている。写真撮ったり、眺めたり、何度もスタートに戻って歩きました。

今 興味を抱いている古代の野たたらのプロセスの謎解きにつながる「炭」の質と製造 銑とケラの取り出し作業など僕にとっては興味深深。

また 役場・教育委員会へ飛び込んで、多くの資料を貰い、また 丁寧に遺跡の情報など聞いたり、電話してもらったり。すっかりお世話になりましたが、思いもかけず、加計 芸北のたたらを訪ねられ、面白い一日でした

又 今回は調べられなかった「神楽」。この地のあちこちでポスター等を見かけましたが、「神楽の道」が「鉄の道」でなかったか とイメージを膨らませています。

今度は 加計・戸河内から石見へそして出雲へ歩いてみたいと思っています。